

REPORT

ショーを見てくれて、「非常に品があり、それでいて斬新だ」とお褒めの言葉を下さった。リップサービスをここでは真に受けておくことにする。

サビエル城を訪問

我々の旅の一行は、パンプローナではほとんど観光をする時間がなかった。大学と劇場そして会社訪問などまさに研修であった。幸運にも筆者のたつての願いであった海岸沿いの町ビルバオのグッゲンハイム美術館（フランク・オーゲイリー設計）に、エクスカッションとして大学のバスが我々一行を連れて行ってくれた。

最後の日には訪問団全員、留学生、ナバラ側の学長、イリアルテ副学長、そしてガリド学生部長とともにサビエルが生まれたサビエル城を訪問した。筆者にとっては4度目の訪問だった。サビエル生誕500周年記念事業に向けて駐車場の大整備、そして城内の大改造がされていてその変化に驚かされた。サビエル村の村長が昼食会に皆を招待して下さい。2006年の様々な事業について熱く語られた村長の言葉からも、ナバラでは2006年が大変記念すべき年として位置づけられ、大きな事業が準備されていることが理解された。

交流の輪は広がる

同行した学生たちは、ファッションショーをすることで言葉の壁を越えて非常に密度の高い交流を実現した。彼らの顔の表情がわずかな訪問だったにも関わらず非常に充実したいい表情になっていることが、大きな成果であった。留学している3名も訪問して2ヶ月半とは思えない程、すっかり現地に馴染み、スペイン語も流暢に語っているのには感心させられた。彼女たちは帰国後、当大学におけるスペインとの交流の輪を益々広げてくれる役割を果たしてくれることだろう。

2006年5月には山口県知事が県民やナバラの会のメンバーとともに、ナバラ州を訪問することになっている。サビエルの縁で結ばれた遠い山口とナバラの人々が、友達になる好機となるに違いない。

山口国際交流芸術祭のお知らせ

テーマ：伝統とひろがり

第4回山口国際交流芸術祭（ヨーロッパ芸術祭）が開催されます。テーマは「伝統とひろがり」 期日：2006年7月7日（金）から9日（日） 場所：山口県立大学講堂 7月7日（金）の夜は「ドイツ音楽の夕べ」とし、没後150年を迎えたシューマンの生涯を朗読とピアノ演奏で辿ります。朗読者として防府市出身の俳優 藤田美保子さんを、またピアニストには防府市出身でベルリン在住の原田英代氏を迎えることを予定しています。7月8日（土）の午後は「イギリス音楽コンサート」です。第1部は山口県内の大人や子どもから成る合唱団と、県内で研鑽を積んでいるピアニストや声楽家らによる歌やピアノ曲で構成し、第2部は山口県立大学吹奏楽団や山口大学管楽楽団などを中心に市民を加えたオーケストラを構成し、指揮者として川崎市在住の清水宏之氏を招いて質の高い音楽を目指します。また、7月8日（土）夜と9日（日）午後にはヨーロッパ映画の上映、絵画などの展示、交流会などを行なう予定です。

生きている文化との出会い

オルカル・テヘロ・ビジャロボス (ナバラ州立大学大学院博士課程学生・山口県立大学交換留学生)

私は日本が大好き。でも、3月に帰国するので寂しいです。山口に住んでいた7カ月の間に大切な事一つ自覚しました。それは、各国の文化で一番重要なものは、そこに生きている人々、そして、その人々がもっている多様な性格や特徴だということです。各国の文化や精神性には悪い面も良い面もあると思います。それに両面は繋がっていて、特定の状況の中で人は良い面を出したり、悪い面を出したりします。私が出会った人々は、本やメディアで知っている日本文化や日本人のステレオタイプの枠を破り、私に新しい日本や日本人についての視点をくれました。それはまさに生きている文化。山口でいろいろ良い友達ができました。親友もできました。「人との出会い」は私にとって日本での最大の出来事でした。お互いに親友になれたから、本当の日本を見つけることができました。

日本ではコミュニティがとても大切にされていて、どこでも人々はお互いを尊敬しています。知らない人との間でも尊敬の気持ちを示し合ったりもします。そんな事が大好きです。スペイン人は個人的すぎるとも思います。もっと尊敬があったらほうがいいのに。でもそんな良い面には悪い面も隠されています。例えば、日本人は自分の意見をあまり言わない。喧嘩をしたくない。だからコミュニティの悪い事を全面に出して直すことが難しいかもしれませんが、社会の問題は一つひとつが人々の責任ですから、日本人の良心をもってスペインとは異なった解決策をみつけていくのだと思います。

最近座禅をしました。「世界の様々な文化における生活の中のユーモアを探る」という私の論文のテーマのために大切な体験でした。社会学は体制や制度などから理性的に世界を説明しようとしてきましたが、精神や感情や意識の世界、つまり、人が世界をどう見るかについて研究することも大切だと思っています。この点で、日本文化から学ぶことはまだまだあるように思えます。たくさんの友達がいる山口を、今では私の生まれた街のように感じています。



誕生日を祝ってくれた仲間達（筆者：左から2番目）

発行 山口EU協会事務局 〒753-8502 山口市桜島3-2-1 山口県立大学事務局内 Tel 083-928-0211 iwano@fis.ypu.jp

おいでませ

EUROPA

No.6

YAMAGUCHI EU Association

山口EU協会事務局 山口市桜島3-2-1 山口県立大学内

もくじ

- 1-2 EUセミナー開催
2 スペイン・ナバラ報告
3-4 ファッションショーを通じた国際交流
4 山口国際交流芸術祭のお知らせ

2005EUセミナー開催

井生文隆（山口EU協会会員、山口県立大学ヨーロッパ委員会リーダー）

FEATURE

山口EU協会主催の2005年度のイベントとして、12月17日に山口県立大学看護西棟F204教室において山口EUセミナーを開催しました。テーマは「伝統と現代の感性-フィンランドと和の文化の出会い-」で、京都から脇阪克二氏(SOU・SOUテキスタイルデザイナー、京都造形芸術大学客員教授)、若林剛之氏(SOU・SOUディレクター)を講師としてお招きし、師走の土曜日にもかかわらず、120名以上が参加し盛況となりました。



オープニング

はじめにEU協会本専務理事より主催者を代表し、山口EU協会の設立、目的、活動、「日本・EU市民交流年」の公式行事のセミナーとしてフィンランドを取り上げ開催する旨を紹介した挨拶がされました。そして、このセミナーを企画し、進行を担当するこの筆者より、テーマの経緯、フィンランドの概略、フィンランドやSOU・SOU社と山口の関係、講師の紹介の後、セミナーが始まりました。

セミナー

講師の脇阪克二氏は、1968～1976年フィンランドのマリメッコ社で、1976～1985年ニューヨークのラーセン社においてインテリア・ファブリックのテキスタイル・デザイナーとして活躍されました。1986年帰国し、ニューヨーク時代より20年にわたり、ワコールインテリアファブリックコレクションにてコレクションを、2002年には再びマリメッコ社からファブリックコレクションを発表され、SOU・SOU社でのデザイン活動を開始して、現在に至っておられます。また、若林剛之氏は、1987～1993年、日本メンズアパレルアカデミーでオーダーメイドの紳士服を学んだ後、(株)ファイブフォックスに入社され、企画パターンを担当。1994年退社され、渡米後、自身で買い付けした商品を扱うセレクトショップをオー

ブンし、2002年、SOU・SOUを設立し、和の伝統と現代の感性を融合した商品を続々と発信されています。その、お二人の講師による各々の講演、また掛け合いトークにより、SOU・SOU社のコンセプト「日本の伝統の軸線上にあるモダンデザイン」とフィンランドでの経験の出会いによるライフスタイルの発信について、お話を伺いました。



脇阪克二氏

脇阪氏は、フィンランドでの経験、感じたこと、なぜフィンランドに行ったのかなどについて、ご持参いただいたテキスタイルの作品やポートフォリオを紹介しながら、現物を用いた実際の講演をされました。「マリメッコ社では何も言われなかった。ただ「Be yourself (あなた自身でありなさい)」とだけ指示された。非常にショックを受け、『自分で何ですか?』『自分とは何だろう?』と苦しんだ後、『自分のやりたいことを思い切りやればいい』ということに気づいた。」というお話が、特に印象的でした。

「フィンランドでは森の中で一人で暮らすのが原点。夏のバカンスではサマーハウスに1ヶ月間、電気、ガス、水道のないところで暮らし、自分自身と向き合い原点を追うというライフスタイル。したがって、フィンランドデザインは本質を追求し、機能に最低限の美しさを追求する。装飾は不要である。したがって飽きがこない。」というフィンランドデザインの哲学の機微に触れることができた興味深い内容でした。

若林氏から脇阪氏への質問による掛け合いトークでは、「フィンランドのデザイナーは自分の描きたいもの、脇阪氏は生地のリピートという枠の中でどうおさめるかという『間』を大事にする。日本らしいテキスタイルデザインは、日本文化の象徴である空間を描くというフィンランドと日本のもの作りには差がある。」など、呼吸のあったやりとりに、楽しく耳を傾けることができました。

若林さんからは、SOU・SOU社の製品アイテムである扇、和菓子、風呂敷、着物(伊勢木綿で着付けを考えない新しい着物)、フード付き羽織、作業衣(ワンピースや、上下同じものを着なくて良い、コーディネーションを考えた日常生活に取り入れやすいもの)、定番のTシャツ(現在まであまり使用されていないひらかな使用)、伊勢木綿のカバン、ゆかた、



若林剛之氏

財布(がま口の口金)などをパワーポイントで紹介されました。

SOU・SOU社の目指すものづくりは、「ファッションブランドではなく日用品で特別なものではない『納豆』みたいなもの。値段はリーズナブル。一般庶民のもの。日本の暮らしにはなくてはならないもの。好きな人も嫌いな人もいる。本物を適正価格ですべての人に。納豆様になってはいけない。自

分自身の文化を探し掘り下げる。自分の内側にあるものを大事にしていくもの作り。」脇阪氏は野菜作りの農家で、大根を作っている。料理人は味付け、料理のストーリーを追求する。フィンランドではマリメッコでのフィンランド料理。ラーセン社では、ワキサカ大根でラーセン料理。ワコールしかり。マリメッコでなく、ラーセン、ワコールでもないSOU・SOU料理」といった、ユニークな例えで、とても理解しやすく、起業家、商品の企画やデザイン関係者などにとっては、大変有意義で貴重なお話であったと思います。

セミナー終了後には、看護学棟ロビーにてレセプションを開催しました。20数名の参加があり、ソフトドリンクと軽食だけではありませんが、講師の方々や参加者が歓談され、なごやかな交流の場になりました。

日本びいきの スペイン・ナバラの人たちとの出会い

安溪遊地(山口EU協会会員、山口県立大学ヨーロッパ委員会委員)
安溪貴子(山口県立大学非常勤講師)

REPORT

フランシコ・サビエルのご縁で、山口県立大学との姉妹提携をしたスペイン・ナバラ州立大学に、2005年4月中旬から9月中旬まで5ヶ月間派遣されました。目的は、学生の交換留学の準備と学術交流・文化交流です。安溪貴子は、ボランティアとして自費で同行し、研究・交流をおこないました。州立大でのスペイン語会話とバスク語初歩との格闘の日々ののち、ナバラ州の各地を訪問しました。面積は山口県の1.5倍、人口は3分の1というナバラは、「多様性の大地」を観光のキャッチフレーズにするだけあって、年間降水量2000ミリ以上の北部のプナの森から南端の400ミリ以下の砂漠まで実に多彩です。しかも、北3分の1は、ヨーロッパ最古の言語といわれるバスク語を話す人々が多い地域です。

ナバラで印象に残った出会いから、2つをご紹介します。ひとつは、グリーン・エネルギーです。EU全体が、二酸化炭素削減のための京都議定書を忠実に履行することに非常な努力をしている中で、ナバラは13年前から風力発電に取り組み、今では2000本の大風車をたてて、現在約70%の電力を再生可能なグリーン・エネルギーでまかなっています。2010年には100%グリーン・エネルギーで自給というのが、ナバラの夢です。

風力以外にたいへん驚いたのが、ワラを燃やす発電所が稼働していて、6%の電力を生み出していることでした。地下資源を使わないバイオマス発電は、山口でも里山の復活とともに注目されているところ。ナバラ州の電気は、おおむねグリーン・エネルギーと天然ガスを使う火力発電所によってまかなわれていて、大型ダム水力発電も、石炭や重油の火力発電も、原子力発電もまったく使っていません(これについては、詳しい数値を入れてhttp://ankei.jpで紹介しています)。ナバラの環境行政は、わずか10年あまりのうちにEUの中でも模範とされる世界でもトップレベルの業績をあげたのです。

もうひとつは、庶民レベルで環境に配慮した生活様式を求めて努力する人々との出会いでした。エネルギー自給の民泊づくりを通して、過疎地の活性化をはかる若いカップルや、自然住宅づくりを通して、「地球にいいことは自分にもいい」という哲学を生きる人々と親しく接することができたのは、大きな喜びでした。エネルギー自給民泊については、上記のウェブページで詳しく報告しましたので、ここでは、自然住宅づくりについて紹介しましょう。

建築士のファン・ルイスさんは、自然に配慮した建築をめざす建築

まとめ

自然との暮らしの営みの中に培われ、人と物と自然の関わりを調和し融合させ育んできたフィンランドデザインが有する、シンプルであるが機能的で暖かいデザインは、いつまでも新鮮な魅力を持ち続けています。これからの時代において大事である「価値の向上と持続」について、SOU・SOU社の製品では展開がなされ、高い評価を得ているということは、国際的な基盤と京都からの発信という視点で、非常に興味深いことであると思います。そして山口という地域からの発信という意味で、とても参考となる講演だったと考えます。

家グループのリーダー的存在でしたが、近頃パンブローナの町中の事務所をたたみ、廃村になっていたアルギニャリツという古い村に健康住宅を建てて住み始めました。ほとんどインドの哲人のような風貌ですが、事実インドが大好きで毎年3ヶ月ぐらいつ滞在するのだそうです。奥さんは、玄米正食を中心とした料理のプロで、二人の娘のうち上の娘は手作りの染め織り、下の娘は現在お父さんとともに廃屋を大改装して新しい農家民泊にするという仕事に取り組んでいます。畑で取れたものを中心とするベジタリアンの生活をする彼女の掌にはいっぱいマメができていました。

健康住宅は、材料に安心・安全なものを使うとともに、エネルギーを賢く使う住宅でもあります。手作りの家は木と石と漆喰からなっています。柱や家具に木がふんだんに使っていて、雰囲気は日本のわが家そっくり。入ってすぐの居間と台所と壁を隔てた奥の仕事場との間の壁に薪の暖炉が作りつけてあり、一つの暖炉の火が3つの部屋から見えるという面白い構造になっています。しかもこれは料理用ストーブを兼ね、さらにそこでできる熱をお湯として壁の中を循環させるというハイテクになっています。お湯のパイプは廃棄が難しい塩化ビニールではなく、ポリプロピレンです。玄関の前にガラス張りのポーチを作って、冬の太陽を受け止める工夫、太陽温水器など、デザインと機能がマッチした懐かしい雰囲気のある、しかも快適な家づくりがされていました。



健康住宅の中

奥さんのクリスティーナさんはパンブローナに住んでいるときは自然食品店を経営していたのだそうです。そのせいか、今でも醤油は1斗缶で買い求めて仲間わけるといいます。案内された倉庫にはゴマやごま油、葛、すり鉢、すりこぎ、醤油、味噌などが置いてありました。お茶は、日本製の三年番茶という徹底ぶりです。

主な収入は、健康住宅づくりセミナーで、現在改装中の家を教材に、近くの古い建築の巡検コースもついて、昼食にはおいしい野菜料理をつけるというコースで、かなりのお値段ですが、家を建てたい人や若い建築士の勉強の場となっているようです。

宿が完成すれば、娘たちが稼いでくれるようになるでしょう。夢を着実に形にしていく、ナバラの友人たちにまた会いに行くのが楽しみです。

ファッションショー“Yamaguchi Meets Navarra 2005”を通じた国際文化交流 山口県立大学とナバラ州立大学との姉妹大学交流事業を事例として

水谷由美子(山口ナバラの会会員、山口県立大学ヨーロッパ委員会委員)

大学間交流のはじまり

山口県立大学が位置する山口市とナバラ Navarra 州の州都パンブローナ Pamplona 市は、宣教師フランシスコ・サビエル (Francisco Xavier, 1506-1552 年) の縁で、すでに姉妹都市として長い交流の歴史を持っている。2005年には両市の交流は25周年を迎え、山口市公式訪問団がパンブローナを訪問している。山口県はこのような文化交流の基盤の上で、2003年11月にナバラ州との姉妹都市提携を、そして山口県立大学はナバラ州立大学と学術交流協定を結んだ。2004年秋にはナバラ州立大学から教員と学生が当大学への最初の訪問があり、具体的な交流が始まった。2005年9月に当大学からは3名の学部生をナバラに留学させ、ナバラ州立大学からは1名の博士課程の学生が当大学に留学して来た。

2005年まさに大学間の本格的な交流が、未知の出会いを孕む大海に船出した。

山口県立大学の訪問団ナバラへ行く

2005年夏にナバラ州立大学から、サビエル生誕500年記念のイベントとして実施するフォーラムへ、教員と学生への招待が当大学にあった。そこで、山口県立大学学長職務代理の猪又徹教授、田村洋教授の二人のグループと筆者のグループ(2005年11月11日~20日)が2班に分かれてナバラを訪問した。私の班には大学院ゼミ生(永富真子)1名、学部ゼミ生(神大樹、藤田智子、宮前恵美、依田香織)4名とともにマスメディアの2名が同行した。一人は山口ケーブルビジョン株式会社の制作局長である入江正敏氏そしてもう一人は読売新聞山口総局記者の細川紀子女子である。現地スタッフの対応や交流はマスメディアの同行も手伝って、大いに盛り上がったと言える。

パンブローナ市立ガヤレ劇場ではじめてのファッションショー



パンブローナ市立ガヤレ劇場での文化交流事業に参加したファッションショーの最後の場面

筆者は「サビエルと大内」をキーワードに1996年から山口市でファッションショーを継続的に実施して来た。その10年目に当たる2005年11月17日に、サビエルの故郷であるナバラ州にて、長年の創作と研究の成果を発表することが出来て、非常に感激をした。すでに2004年にナバラ州立大学の訪問団を歓迎する交流会で、「山口 Meets ナバラ」を当大学講堂で公演しており、その内容をさらにヴァージョンアップして



サビエル城前でナバラ州立大学と山口県立大学側のスタッフなどの集合記念写真

「Yamaguchi Meets Navarra 2005」をパンブローナの伝統あるガヤレ劇場で実施した。

現地に半年滞在していた安溪遊地教授の紹介で、モデルコーディネートをして下さった松川仁美女史のおかげで、モデルを見つけることが出来た。ファッションショーではモデル探しは極めて重要な前仕事である。また、ヘアーメイクはパンブローナ市を代表するデザイン会社ククシムシ社に依頼をした。この会社の代表デザイナーであるミケル・ウルメネタ氏を2000年3月にジェットロ主催のミニ&L事業の支援で、山口に招聘しワークショップを実施した。それ以来交流がある。

実際に海外でまとまったショーを実施するのは初めてのことで、訪問の話があった8月末から11月の本番までの約3ヶ月弱の間、かなりのエネルギーを費やした。

学生と筆者はともに作品を新たに制作したり、サイズ直しをしたりと準備に忙殺された。実際のショーでは打ち合わせ時間、リハーサル時間が極めて少なく、盛りだくさんのプログラムで、ショーの幕が開く直前まで舞台裏はパニックであった。幸運にも全体のショーはスムーズに流れ、我々のトリのショータイムも暖かい観客のおかげで成功裡に終わった。

日本で準備している段階でモデルが当初見つからず、大内義隆役は猪又教授、サビエル役は田村教授そして2名のゼミ生、現地へ留学している当大学の留学生2名そして筆者の合計7名がモデルをせざるを得ないことが決まっていた。その後、スペインの10名の男女モデルが決まり、日・西の混成チームで競演した。特に筆者の体験として面白かったのは、柳井縞の着物を着た筆者と日本語を勉強しているスペイン女性2名の場面である。

後に入江氏が制作した番組「サビエルの絆」を見ると、スペインの二人のモデルは、しゃなりしゃなりと内股で歩いている。それとは対照的に筆者は音楽のリズムに乗って洋服感覚で歩いている。着物に対する意識や身体表現が両者で逆転していたのだ。

山口の提灯祭の提灯が装置として飾られた舞台上で、17点の作品を発表した。大学関係者や市民が始めてファッションショーを見た人もおられ、喜んでくれたようだ。イリアルテ副学長は2年続けて我々の